

If Dreams Come True
イフ・ドリームス・カム・トゥルー
Eddie Higgins Trio
エディ・ヒギンズ・トリオ
1. イフ・ドリームス・カム・トゥルー
If Dreams Come True (E. Sampson)(5 : 52)
2. サマータイム
Summertime (G. Gershwin)(5 : 27)
3. イッツ・オール・ライト・ウィズ・ミー
It's All Right With Me (C. Porter)(6 : 14)
4. ムーン・アンド・サンド
Moon And Sand (A. Wilder)(3 : 11)
5. マイナー・スイング
Minor Swing (D. Reinhardt)(3 : 13)
6. シェルブールの雨傘
I Will Wait For You (M. Legrand)(5 : 40)
7. ウィークエンド・イン・ハバナ
A Weekend In Havana (Gordon, Warren)(3 : 30)
8. イントゥー・ザ・メモリー
Into The Memory (C. Mun)(3 : 25)
9. セントルイス・ブルース
St Louis Blues (W. C. Handy)(4 : 00)
10. 新宿トワイライト
Shinjuku Twilight (E. Higgins)(4 : 30)
11. フレネシー
Frenesi (A. Dominguez)(4 : 51)
12. ナイチンゲール
Nightingale (X. Cugat)(5 : 19)
13. キャラバン
Caravan (D. Ellington)(3 : 54)
14. 酒とバラの日々
The Days Of Wine And Roses (H. Mancini)(6 : 47)

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins (piano)

ジェイ・レオンハート Jay Leonhart (bass)

ジョー・アシオーネ Joe Ascione (drums)

録音：2004年7月6、7&8日 *アヴァター・スタジオ*、ニューヨーク

©© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded by David Darlington at Avatar Studi in New York on July 6 , 7 & 8 , 2004.

Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.a.

© Conde Nast Archive / Corbis / Corbis Japan.
Artist photos by John Abbott.
Designed by Taz.

ない。ごく一部の凝り固まった人たち。ジャズは難解でないと高級ではないと思いついでいる人たちがいて、本当にこいつら厄介な存在だ。

たとえばこの人たちはエディ・ヒギンズをどう思うだろう。ありふれたスタンダード並べてさ、おまけに大昔の大衆向けラテン曲なんかやっちゃって、クリエイティブのクの字もない。こういう作品がジャズを駄目にするんだ。

バカ野郎、と私は上品な人間だがつい下品な言葉を発してしまう。あんたたちが妙にジャズを精神視し、神棚に上げ、難解をもってよしとする、そういう風潮がジャズの発展を妨げているんだ。ジャズ・ファンの数を減らしているのだ。

まあ、いい、そんなことは。嫌なことは考えまい。エディ・ヒギンズのピアノを聴けば、そんなことは霧散してしまう。

エディ・ヒギンズのピアノは聴く人の気持ちをはぐすピアノである。美しく優しくそして端正にするピアノである。だからエディ・ヒギンズ・タイムというのがある。エディ・ヒギンズを聴く適切な時間。サラリーマンの方なら会社から帰り、食事をし、風呂に入ってさて寝るか。今日は少し会社で嫌なことがあった。ちょっとトゲが胸にささっている。しこりが残っている。そういうトゲを抜き、しこりを除いてくれるのがエディ・ヒギンズのピアノなのだ。安静な眠りを約束してくれるのである。

こういう心境は、難解そして先端的なジャズを好む連中にはわからない。ざまみろ、である。

さて、曲は全部で14曲入っている。以前私はCDの曲数の多さを非難めいた言葉で語ったことがあった。昔のLPレコードのように6曲でいいんだよ、と。それは場合によりけり、ということがこのCDを見てわかった。こんなふうに関曲良曲であれば多くたってぜんぜん構わない。

相変わらずいいですねえ、エディ・ヒギンズ。

そりゃ、確かにある。えっ、またエディ・ヒギンズ出たの？

という思い。そういうエディ・ヒギンズ慣れ現象はあるものの、しかし聴いてみるとやっぱりよいのである。一年ないしは二年くらいに一作という寡作の人は期待感も手伝って2割くらいは実際よりよく聴こえるだろう。しかしほとんど出す人で、そのつど評判を呼ぶのは大変だ。

椎名誠さんがエッセイに書いていたけれど、自分は村上春樹さんが羨ましいんだと。椎名さんは雑誌その他に執筆年中の多作の人である。一方、村上さんはまったくといっていいほど雑文を書かず、一年か二年に一冊の単行本に賭けている。そして大きな評価を得ている。得だなぁと。

そんなことないですよ、椎名さん。書き散らしていても、そして我々が読み慣れてはいても、そのつど、ああいいなあと思わせる人間的スキルを持ったあなたは素敵です。

そういえばエディ・ヒギンズも間違いなく、人間的スキルの人である。聴き慣れてはいるけれど聴けばやっぱりすばらしいなぁと思わせる術を心得ているのだから。

今回のエディ・ヒギンズ、私は近頃のものの中で最も好きな一枚だ。また同じことを言い出したなとお思いだろうが、好きな理由は曲である。

演奏？　演奏はもう間違いない。もうお慮だが、今回は衰えたかな、などという心配はまったく無用。一作ごとに若返るんじゃないかというほどの華麗にしてエネルギッシュな指さばきだ。皆さん、お聴きの通りである。安心して聴けるのがヒギンズの欠点、と言いたいくらいの円熟ぶり。彼一流のまろやかなスイングは相変わらず健在だ。

となると、ファンの期待は、取り上げる曲いかにかかってくる。今回の選曲。どうです、皆さん、と私が胸を張るのもなんだが、こういう一連の曲集めを好選曲という。

気取らない選曲。奇をてらわない選曲。なだらかな選曲、それでいてスリルを失わない選曲。

まるで気取らない美術館の展覧会の絵みたいではないか。一枚一枚に目をやりながら観客はふと足を停めたり、目を細めたり、あるいはひそかに微笑んだりしながら、豊かで柔らかい時間を過ごす。

私が足を止め、そしてホクソ笑んだのが「ナイチンゲール」「ウィークエンド・イン・ハバナ」「フレネシー」といったラテン物だった。「ウィークエンド・イン・ハバナ」はハリー・ウォーレン作曲だから、正式のラテンとは言い難いかもしれない。しかしハバナの名が付けば立派なラテン曲。少なくともウォーレンはハバナに思いを致して作曲したに違いない。展覧会の中でひときわ鮮やかなスポットライトを浴びて、この3曲は輝いている。

私は特に「ナイチンゲール」の前で足を停めて動かない。「マイ・シヨール」などラテンの名曲という名曲はすべて彼が作ったのではないかというほどのラテンふう旋律の王者ザビエル・クガート、英語読みザビア・クガーの作品だ。彼の曲の中で最もひっそりとした一曲。熱帯にひそかに咲いた一輪の花。これにまいってしまったのだ。してやられた。

エディ・ヒギンズぐらしい音楽人生の達人になると、もはや曲を崩すなどということはない。そんな小賢しいことをして自分を進歩的なミュージシャンに見せようなどという魂胆はない。あるのはひたすら美しい曲を美しく弾き、自分も曲を楽しみ、聴く人にも美しい楽しみを与えようとするエンターテイン精神だ。

しかしこのエンターテインメントの気持ちがなかなか理解できないのがジャズ・ファンという種族なのだ。すべてのジャズ・ファンでは

要するに数の問題ではなく、良曲であるかどうかの問題なのだ。

私はいつも1曲目から通して聴くことはしない。必ず自分の好みの曲を選んでボタンを押す。もうそれはどんなCDでも同じで、このCDは(2)(7)とか、あるいは別なCDは(3)(8)とか、完べきに近い形で決まっている。大体2曲くらいである。

しかしこのエディ・ヒギンズ盤はそれがかなり多い。選んでみよう。先のラテン曲が3曲。それに加えて「イツツ・オール・ライト・ウィズ・ミー」「マイナー・スイング」「セントルイス・ブルース」「新宿トワイライト」。全部で8曲にもなってしまった。

まず「イツツ・オール・ライト・ウィズ・ミー」だが、この曲はいつもJ・Kトロンボーン・チームの演奏を喜んで聴いている。その近代建築風のプレイに比べ、ヒギンズのそれはなんと日本家屋風なのだろう。心がなごむのである。

アドリブを楽しむ。ちなみにアメリカではアドリブと言わないらしい。ソロと称するというのを誰かから聞いた。そうだ、ピアノの白崎彩子さんだ。メロディアスなソロの中で2分21秒、そして2分40秒あたりでソロの展開が変化してゆく。このバリエーションが聴いていて気持ちがいい。セカンド・リフと言っているのか、第二主題みたいなフレーズを設定し、そこからまた新たなソロを紡いでゆく。

そういえば昔のジャズの楽士は、いわゆるテーマという主題のほかにセカンド・リフと呼ぶ第二テーマを用意した。ソロが長くなって退屈しようと、サービスで「もう一曲」付け加えてくれたのである。今のミュージシャンにそんな心遣いはない。残念である。

ジャンゴ・ラインハルトの「マイナー・スイング」はまず曲名からして最高だ。音が聴こえてくる曲名とはこういうのを言う。ジャズでマイナー調でブルース風なら言うことなし。

この曲でも1分あたりから明るい、輝かしいソロの発展的展開がある。麗しいフレーズが次々に現れて、こちらの気分は爽快だ。もう少し続けてくれと願う切ない気持ちを裏切るようにベースのソロに入ってしまう。

演奏時間が3分と少々。まさに3分間芸術の名にふさわしい。ソロというのはもうちょっと聴きたい、ぐらいいいのである。

私が世界3大楽曲の一つに挙げる「セント・ルイス・ブルース」。エディ・ヒギンズは、これはまたなんと古風な弾き方をしたものだろう。プギウギ風である。だいたい前に原宿駅近くの今はなきライブ・ハウス、キーノートで「セント・ルイス・ブルース」を弾くエディ・ヒギンズを見たことがある。これ一曲弾いて店内のムードが一変した。エディ・ヒギンズは身体を大きく動かし、やや大仰にピアノを叩いた。ライブ・ハウスは1920年代のパレル・ハウスに変身し、大きな拍手がわいていた。

そして「ナイチンゲール」とさてどっちを私の最大の好物にしようかで大いに迷う「新宿トワイライト」。これはメロディーの絶品、メロディーの華、メロディーの極致、幾つでもそんな言葉が現れ出てくる。いやはや、こんな美麗旋律がジャズにあっといういのだろうか、というくらい驚異の一曲。

あの紳士風のエディ・ヒギンズ。アメリカのハイスクールの校長先生然としたエディ・ヒギンズのどこからこのような美意識が生まれるのだろう。「ナイチンゲール」「新宿トワイライト」。この2曲のすばらしさゆえに、このCDは私にとっての最高の贈り物となったのである。ミスター・ヒギンズ、ありがとう。

寺島靖国